

次元形容詞「高い」の意味体系に関する日中対照研究

金 善花*

日本語の「高い」と中国語の“高(gāo)”には、空間的用法と非空間的用法が見られる。そのうち、「高い」と“高”の非空間的用法に違いが見られるが、その背後には、意味の捉え方に違いが存在する可能性があると考えられる。しかし、今までの「高い」と“高”に関する研究では、言語的な知識の記述と分析が中心になっており、言語主体の認知能力や運用能力との関連で、意味体系の実態を明らかにした研究は少ない。

そこで、本研究では、國廣(1971)、西尾(1972)、舩山(2001)の研究を踏まえ、「高い」と“高”の空間的用法と非空間的用法に見られる複数の意味を記述し、複数の意味の間の関係をネットワークとして示した上で、「高い」と“高”の意味拡張の認知プロセス、意味体系のありかたを検討し、その相違点を探ってみた。

「高い」と“高”の意味体系の対照を通して、次のような結論が得られた。(1)「高い」と“高”は、プロトタイプの意味、意味拡張に見られる認知プロセスが大きく類似している。(2)「高い」と“高”の空間認知において、五感を介する経験が経験的基盤となる点で共通している。しかし、五感のうち、嗅覚経験を介する対象の捉え方に違いが見られる。(3)「高い」と“高”の意味体系において、空間的用法は起点領域という役割をし、非空間的用法はイメージが写像される目標領域の役割を果たしている。したがって、「高い」と“高”の非空間的用法には違いが見られるが、意味拡張の仕方と意味の捉え方は類似していると考えられる。

キーワード：プロトタイプ、スキーマ、意味拡張

0 はじめに

日本語の「高い」には、空間内に存在する対象(例：山、木)に使用される用法と、抽象領域の対象(例：血圧、物価)に使用される用法が見られる。中国語の“高(gāo)”¹にも、空間内に存在する対象に使用される用法と、抽象物に使用される用法が見られる。本研究では、空間内の対象へ使用される用法を空間的用法、抽象領域の対象に使用される用法を非空間的用法と呼ぶことにする。

日本語の「高い」と中国語の“高”の空間的・非空間的用法には、同じ用法もあれば、違う用法も見られる。例えば、中国語の“高”には“高作(gāo zuò)”“高见(gāo jiàn)”のような尊敬の意味を表す用法や、“高言(gāo yán)”のよ

*キン・ゼンカ、埼玉大学大学院文化科学研究科博士後期課程、日本語学

¹ 以下では、中国語の“高”の表音式表記“gāo”を省略する。

うに現実離れの意味を表す用法が見られるが、日本語には見られない²。この用法の違いが見られる背後には、「高い」と“高”の意味の捉えかたに違いが存在する可能性がある。そのような問題を解明するには、「高い」と“高”の意味を体系的に対照し、意味の捉え方を明らかにする必要がある。

本研究では、國廣（1971）、西尾（1972）の研究を踏まえ、多義語分析の課題（初山 2001）に基づいて、「高い」と“高”の意味体系を明らかにする。そして、「高い」と“高”の意味体系を対照し、意味体系における空間的用法と非空間的用法の役割、空間的用法から非空間的用法へ意味拡張が行われる認知プロセスや動機付けを明らかにすることを目的にする。

1 で先行研究と問題点について記述する。2 では日本語の「高い」について、3 では中国語の“高”について、空間的用法と非空間的用法に見られる複数の意味を記述し、プロトタイプの意味と複数の意味の関係を明らかにした上で、意味のネットワークモデルを検討する。それから、4 で、「高い」と“高”の意味体系に見られる相違点を明らかにし、その動機付けと認知プロセスを考える。

1 先行研究と問題点

1.1 日本語の「高い」に関する先行研究

國廣（1971）、西尾（1972）、久島（2001）、小出（2000）は、次元形容詞「高い」について、次のように述べている。

國廣（1971）は「高い」について、「水平面を基準とする垂直の隔たりに関して、ある標準値から上向きに隔たっていると仮定される」、「問題となっている物体が基準面とつながりを持っているかいないかは無関係であり、また物体の上端が点的であるか面的であるかも無関係である。つまり、注意点の位置のみを問題にしていることになる」と述べている。しかし、國廣は、水平面と垂直関係を持っていない対象（台、机）や、身体関連部位の対象（例：頬骨、鼻）については、あまり言及していない。

西尾（1972）は、「高さの制限が無く、形容されるものの以前の形がどうだったかについては問題にしていない。もの自身のもっている量的な性質を表すこともあり、また他のものとの関係的な位置を表すこともある」と述べているが、なぜ「高い」に性質を表す用法と位置関係を表す用法が見られるかに対しては、触れていない。

それに対し、久島（2001）は、次元形容詞を「モノ」と「場所」の2種類に分けた上で、「高い」を「場所」類の次元形容詞として扱い、次のように述べている。「場所」に定義される名詞に対しては、「上方への鉛直の線的な量」、鼻など「準場所」は、「それが本体から外部へ突き出している線の量」、「地点」としては、「上方への鉛直の線的な距離」を表すと言っている。しかし、「高い」の解釈で「高い木」の「木」を「場所」と捉えることなど、理解しに

² 日本語にも「高見、高著」など相手を敬つていう言い方が存在し、一見中国語の“高見（gāo jiàn）”と同じように見えるが、この類の漢語による複合語における「高（コウ）」は、「高い（たかい）」の独立形式による用法ではないため、触れないことにする。本稿では、「高い＋名詞／名詞＋高い」の構文形式のみを対象にする。

くいところが見られる。

小出(2000)は、「高い」について、4点に分けて説明している。1)「高い」は空間的に独立した立体的な形を持つ対象に使われる。2) なんらかの基準点を持つ。3) 意味ある「鉛直上方」の延びを持つ。4) 基準面と固定的な関係を持つ。しかし、小出は、「山」を空間的に独立した立体的な形とする言い方や、基準点・注意点の概念およびその相互関係などについては、詳しく説明していない。

1.2 中国語の“高”に関する先行研究

中国語の形容詞は表す機能によって、“性質形容詞(性質形容詞)”と“状態形容詞(状態形容詞)”に分類される(朱德熙 1956)。“性質形容詞(性質形容詞)”は、事物の性質を表し、一般的に程度副詞“很(hěn)”に修飾される。(形容詞の重ね型は程度副詞に修飾されない。)”状態形容詞(状態形容詞)”は、事物の状態を表し、程度副詞“很(hěn)”に修飾されない。陆俭明(1989)は、中国語の“性質形容詞(性質形容詞)”の中から、次の形容詞を量的形容詞として分類している。

- a. “大(大きい)”“长(長い)”“高(高い)”“宽(広い)”“厚(厚い)”“粗(太い)”“深(深い)”“重(重い)”“远(遠い)”“快(速い)”“早(早い)”“贵(高い)”“多(多い)”
- b. “小(小さい)”“短(短い)”“低/矮(低い)”“窄(狭い)”“薄(薄い)”“细(狭い)”“浅(浅い)”“轻(軽い)”“近(近い)”“慢(遅い)”“晚/迟(晚い)”“贱/便宜(安い)”“少(少ない)”

さらに、その中からものの形状や性質を表す量的形容詞として分類されたのが、次の7組の形容詞である。

“长(長い)・短(短い)”
 “高(高い)・低/矮(低い)”
 “深(深い)・浅(浅い)”
 “宽(広い)・窄(狭い)”
 “粗(太い)・细(狭い)”
 “厚(厚い)・薄(薄い)”
 “大(大きい)・小(小さい)”

しかし、中国語の次元形容詞に関する研究は、文法的な記述と分析に偏っており、意味的な研究はあまりされていない。

上で見てきたように、今までの日中両言語の「高い」と“高”に関する研究は、言語的な知識の記述と分析が中心になっており、複数の意味の間の関係や、意味拡張の認知プロセスなどに関する体系的な研究は、あまりされていなかったため、意味の捉え方や意味体系の実態が明瞭ではない。つまり、身体的な経験を反映する言語主体の認知能力や運用能力との関連で、言語現象の本質を捉える視点が欠けているように思われる。

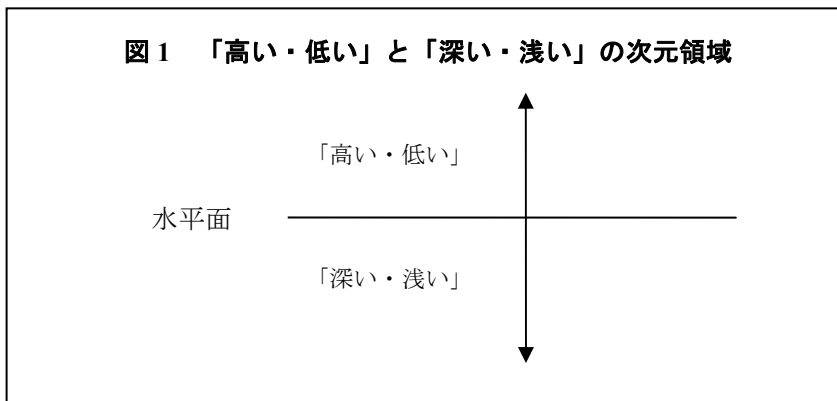
2 日本語の「高い」について

日本語の「高い」について、國廣（1971）、西尾（1972）、靱山（2001）の研究を踏まえ、空間的用法と非空間的用法に見られる複数の意味を記述し、その相互関係について考察した上で、「高い」の複数の意味をネットワークとして示す。

2.1 「高い」の空間的用法

1) 次元形容詞のグループにおける「高い」

日本語には、8組の次元形容詞「長い・短い」「高い・低い」「深い・浅い」「遠い・近い」「広い・狭い」「太い・細い」「厚い・薄い」「大きい・小さい」が存在する。その中で、ベクトル性（ある基点からの一方向）を含んでいる点で、「高い・低い」「深い・浅い」「遠い・近い」が区別される。この3組の次元形容詞のうち、「遠い・近い」は、対象物そのものに備わった性質ではなく、2つの対象あるいは地点間の隔たりを表す点で、区別される。「高い・低い」「深い・浅い」は一次元量を表す点で共通しているが、水平面から上方向か下方向かという点で区別される（國廣 1971）。「高い・低い」「深い・浅い」の次元領域を簡単に図式してみると、図1のようになる。



2) 「高い」の空間的用法に見られる複数の意味

「高い」の空間的用法において、以下のような例³が見られる。

- [1] 「高い山, 高い木, 高いビル」
- [2] 「高い空, 高い雲, 高い日」
- [3] 「高い台, 高い棚, 高い椅子, 高いヒール」
- [4] 「高い鼻, 高い頬骨, 高い額, 高い尻」
- [5] 「(人の) 背が高い」

[1]の「高い」は、地面から垂直上方向への線的距離が大きいという意味を

³ 本稿では、意味の広がりに関する考察を主とし、用例に見られる統語上の不一致（「高いX」か「Xが高い」か）の問題に関しては、触れないことにする。

表す。山や木のような対象は、地面と一体になり、地面から垂直上方向の性質を持っているが、この性質を失うと「高い」と認識されない。例えば、切られた「木」に対して「#高い木」⁴と言わないし、鉛直方向が下方向になっている「つらら」を「*高いつらら」⁵と言わない。

[2]の「高い」は、地面から上方向へ大きく離れ、空間的に上に位置する意味を表す。空や雲のような対象は、地面と実質的に繋がっていないが、地面から上方向への線的距離が大きいという点で、[1]と共通している。したがって、[2]の対象の認識では、地面からの線的距離が還元され、空間的位置が焦点化されていると考えられる。

しかし、止まっている車や空を飛ぶ飛行機に対して、「#高い車」「#高い飛行機」と言わないのは、なぜだろうか。それは、車や飛行機は、[1][2]の対象と違って、動くイメージを持っていることが考えられる。[1][2]の対象は、人工的に力を与えない限り、場所や形を変えることがなく、地面と固定的な関係を持っていると言えよう。

[3]の対象は[1][2]の対象と違って、必ず地面を基準にしているわけではない。つまり、位置変化が自由で、地面と固定的な関係を持っていると言えない。しかし、正常態にしているても、壊れてしまった台を「高い台」と言わないし、転がっている棚でも、ものを整理する機能さえ持っていれば、「高い棚」と言えることから、ものの認識において、形の認識が機能の認識に先立つことはない（小出 2000）ことが分かる。したがって、[3]の対象の認識においては、基準面と地面との関係が問題にされるのではなく、ものの機能を果たすために空間内の固有のありかたをしているかどうか問題にされていることが分かる。したがって、[3]の「高い」は、〈（ものが機能を果たすために存在する空間内の固有のありかたにおいて）下から上までの垂直距離が大きい〉という意味を持つと考えられる。〈下から上までの垂直距離が大きい〉という特徴は、[1]に見られる意味特徴と類似性が見られる。

[5]「（人の）背」も、人が直立したり、横になったり、しゃがんだりして、いろんな姿勢や動作をチェンジすることができるため、地面と固定的な関係を持っていると言えない。しかし、直立した姿勢が、人間の日常生活の中で一番主要な姿勢の一つとして認識されるため、「背が高い」というと、直立している人がイメージされることが多い。この場合は、地面から垂直上方向という方向性が見られるが、横になった場合は、その方向性が潜在化される。つまり、「（人の）背」は、地面から頭上までの長さを言うのではなく、人体のかかから頭上までの垂直距離を問題にすることが分かる。したがって、[5]の「高い」には、人体のかかから頭上までの垂直距離が大きいという意味特徴が見られる。

[4]の「高い」は、身体表面から垂直方向へ突き出ている線的量が大きいという意味を表す。鼻や頬骨のように、身体表面から外へ突き出ている部分は「高い・低い」と認識され、身体表面から食い込んでいる部分（例：傷）に対しては「深い・浅い」と認識される。したがって、身体関連部位の認識において、身体表面が基準面となることが分かる。[4]に見られる「基準面と一体化にな

⁴ #は、表現自体は存在するが、当該の意味では使えないことを表す。

⁵ *は、不自然な表現を指す。

り、基準面から垂直した線の距離が大きい」という特徴は、[1]に見られる意味と類似している。

3) 複数の意味の関係とネットワークモデル

上で見られた「高い」の空間的用法の複数の意味をまとめてみると、次のようになる。

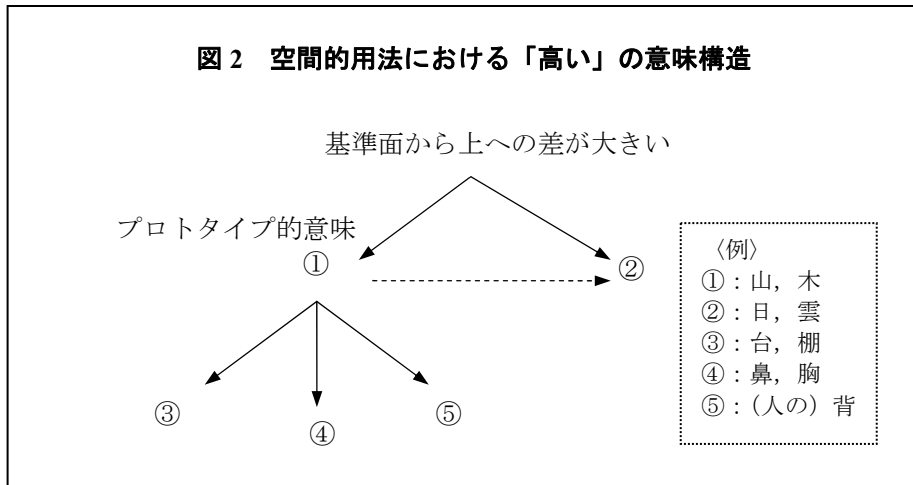
- ① 〈地面を基準面とする〉、〈地面と垂直上方向への線の距離が大きい〉、〈地面と固定的な関係を持つ〉。([1])
- ② 〈地面を基準面とする〉、〈地面と垂直上方向への線の距離が大きい位置にある〉、〈地面と固定的な関係を持つ〉。([2])
- ③ 〈(ものの機能を果たすための固有のありかたにおける) 下から上への垂直距離が大きい〉、〈地面と固定的な関係を持たない〉。([3])
- ④ 〈身体表面を基準面とする〉、〈身体表面から垂直上方向への線の距離が大きい〉、〈地面と固定的な関係を持たない〉。([4])
- ⑤ 〈かかとを基準面とする〉、〈かかとから頭までの線の距離が大きい〉、〈地面と固定的な関係を持たない〉。([5])

上の複数の意味は、〈基準面から上方への線の距離が大きい〉という特徴で共通していることが分かる。各意味によって基準の変化が見られるが、その中で地面が一番典型的な基準面となっていることが分かる。したがって、プロトタイプ性のもっとも高い意味を、①に認定することができる。つまり、①がプロトタイプの意味⁶で、山や木のような対象を具体事例として考えられる。②は線の距離を還元し、空間的位置を焦点化しているため、プロトタイプの意味との類似性による拡張だと考えられる。③④⑤は、プロトタイプの意味の具体事例の〈基準面から上方向への線の距離が大きい〉というスキーマ⁷によって、拡張された意味だと考えられる。さらに、①と②の共通点、類似点によって、〈基準面から上への差が大きい〉というスキーマを抽出することができる。このような意味関係を、ネットワークモデルにしてみると、**図2**のようになる。(点線の矢印は拡張関係を表し、実践の矢印はスキーマ関係を表す。)

⁶ 複数の意味の中で、最も基本的であり、慣習化の程度・認知度の際立ちが高いといった特徴を備えたものをプロトタイプの意味と認定する。

⁷ スキーマとは、ラネカーなどの考えで、カテゴリーのすべてのメンバーあるいは一部のメンバーに適合する抽象的な意味である。

図2 空間的用法における「高い」の意味構造



2.2 「高い」の非空間的用法

西尾（1972）の分類を踏まえて、「高い」の用例を挙げると、次のような例がある。

①質的・価値的にすぐれている。

[6]「価値が高い，地位が高い，家柄が高い，誇りが高い，プライドが高い，理想が高い，志が高い，能力が高い，教養が高い，人格が高い」

②価値的な要素が失われて，単に量的・程度的にいちじるしい。

[7]a「点数が高い，体温が高い，温度が高い，血圧が高い，人口密度が高い，死亡率が高い，比重が高い，音が高い，声が高い」

b「悪名が高い，名が高い，噂が高い，評判が高い，人望が高い，人気が高い，香りが高い，匂いが高い」

③売り買いされときの金額が大きい。

[8]「値段が高い，価格が高い，税金が高い，利子が高い，部屋代が高い」

上の例に見られる対象は，数値や計器などで測定可能な対象と不可能な対象に分けられる。

1) 測定可能な対象

[7]a, [8]に見られる対象は，その状態を数値で測ることができる。例えば，「温度，血圧」などは，温度計などの計器を利用して，線的尺度上で数値を確認することができ，「値段，比重」のような対象は，金額やパーセンテージで測ることができる。しかし，数値で測れる対象なら，全部「高い」と認識されるわけでもない。例えば，「*枚数が高い，*人数が高い，*交通量が高い」のような言い方をしない。それは，「血圧，値段」のように，線的尺度上で上へ伸びるイメージを持たないことが考えられる。この特徴によって，測定可能な対象は，「～が高い(高い～)」から「～が上る」へ言い換えることができる。

例えば、「物価が高い、値段が高い、確率が高い」は「物価が上る、値段が上る、確率が上る」と言い換えることができる。

したがって、測定可能な対象に使用される「高い」には、〈線的尺度上で上へ伸びるイメージを持つ抽象物の量が大きい〉という意味特徴が見られる。この用法は、空間的に上へ延びるという特徴が、イメージスキーマとして、抽象的な数字領域へ拡張された用法だと考えられる。

2) 測定不可能な対象

[6], [7]bの「高い」は、価値や質や程度が一般より上にあるという意味を表す。「評判、人望、人気」のような対象は、隠れることなく周囲へ広く知られているため、他より優越だと認識される。「香り、匂い」は、五感の嗅覚を通して認知される対象で、優れた香りの気体が空間的に上方まで上がり広まって、人々に認識しやすいため、「高い」と認知されと考えられる。しかし、日本語の「高い」は、必ずしもいいイメージに使用されるわけではなく、マイナスイメージの「悪名」「噂」のような対象も見られる。

このように、測定不可能な対象は、価値・質・程度が〈序列尺度上一般より上に位置する〉という意味特徴が見られる。空間的に高いものは周りから見やすく、人々に認識されやすい(西尾 1972) ため、空間的に上にあるものは、他より優れていて、価値の高いものと認識されやすい。したがって、測定不可能な対象に使用される「高い」は、空間的用法に見られる〈空間的に上に位置する〉という意味特徴が、イメージスキーマとして拡張された用法であると考えられる。

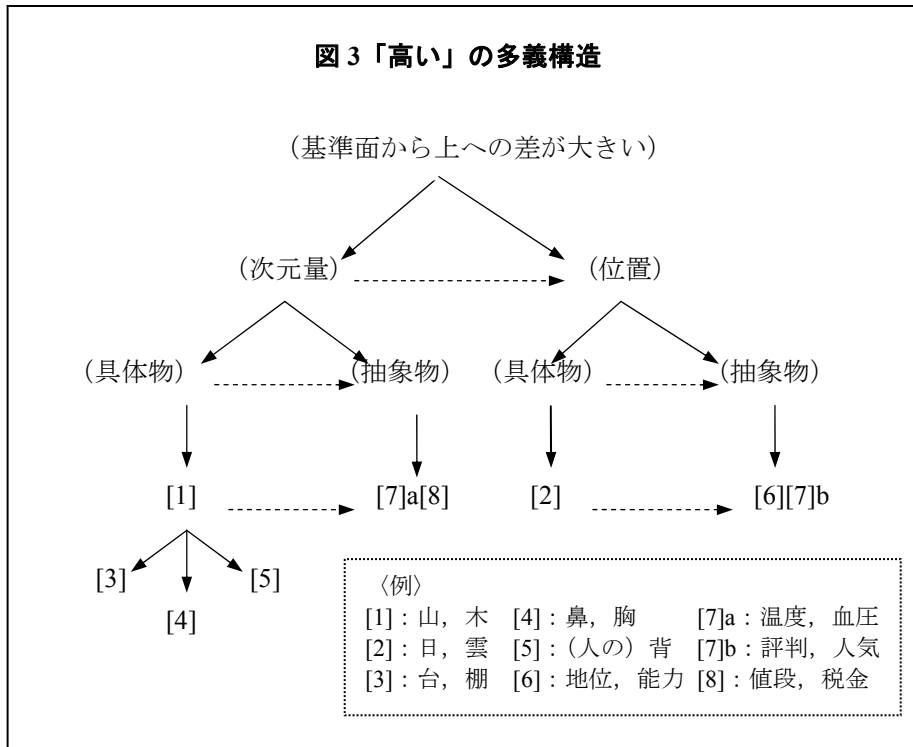
したがって、「高い」の非空間的用法に見られる意味特徴を、次のようにまとめることができる。①線的尺度上で量が大きく、上へ伸びるイメージを持つ。②価値・質・程度が優れて、序列的に一般より上に位置するイメージを持つ。

このように、「高い」の意味拡張では、知覚、イメージ形成、具体事例からのスキーマ化の能力、スキーマの拡張による新しい事例の予測などの認知能力が、不可欠な要因になっていることが分かる。このような点は、言語的な知識の記述と分析を中心になされてきた先行研究では、あまり言及されていない。

2.3 日本語の「高い」の意味体系

「高い」の空間的用法と非空間的用法に見られた複数の意味の関係を、図式化してみると、**図 3** のようになる。(点線の矢印は拡張関係を表し、実践の矢印はスキーマ関係を表す。)

図3 「高い」の多義構造



3 中国語の“高”について

本節では、中国語の“高”の空間的用法と非空間的用法に見られる複数の意味を記述し、各意味の相互関係について考察した上で、“高”の複数の意味をネットワークとして示す。

3.1 中国語の“高”の空間的用法

1) 中国語の形容詞構文について

中国語の形容詞は、名詞と関係を持つとき、主に連体修飾語や述語として使用されるが、程度副詞と共に起⁸するか、重ね型⁹などの複合語の形で使用される

⁸ 形容詞述語文の肯定文の場合は、「主語＋很（程度を表す副詞）＋形容詞」の形が多く、連体修飾語として使用される場合は、「很（程度を表す副詞）＋形容詞＋的」の形が多い。“很”は程度を表す副詞で、「とても、大変」と同じ意味を持ち、日本語訳では訳されないことが多い。

⁹ 普通、単音節形容詞、一部の二音節形容詞および多数の状態形容詞は「重ね型」をとることができる。形容詞の重ね型が連体修飾語や述語になる場合、通常後ろに“的（de）”がつく。よく見られる形容詞の重ね型には、次のようなパターンがある。

① 単音節 A→AA 的 “大大的（でっかい）” “高高的（高々としている）”

② 2 音節 a. AB→AABB（的）“清清楚楚的（はっきりしている）”

b. AB→ABAB（的）“雪白雪白（的）（雪のように白い）”

ことが多い。

2) “高”の空間的用法に見られる複数の意味

“高”の空間的用法には、次のような例が見られる。

[9] “山很高 (山が高い), 树很高 (木が高い), 楼很高 (ビルが高い), 墙很高 (塙が高い)”

[10] “天很高 (空が高い), 太阳高高的 (太陽が高い), 白云高高的 (白雲が高い)”

[11] “高台 (高い台), 高罐 (高い筒), 桌子高 (机が高い), 高根鞋 (ハイヒール)”

[12] “个子高 (背が高い)”

[13] “鼻梁高 (鼻が高い), 颧骨高 (頬骨が高い)”

[9]では、木やビルなどの対象が、地面から上方向への伸びが大きいという意味を表す。[9]の対象は、地上の部分と地下の部分を持っているが、地下の见えない部分は対象にされていない。つまり、地上の次元のみを問題にしていることが分かる。また、地面と繋がりをもっているため、地面から垂直上という方向性が見られるが、この方向性を失ってしまうと、“高”と認識されない。例えば、伐採した“树 (木)”に対しては、“高”と言わない。

[10]では、“天 (空), 太阳 (太陽), 白云 (白雲)”のような対象が、地面から大きく離れ、空間的に上に位置する意味を表している。[10]の対象は、木や山のように地面と実質的に繋がっていないが、空間的位置が〈地面から上への線的距離が大きい〉点で、[9]と共通している。したがって、[10]の対象の認識では、地面からの線的距離が還元され、地面からの空間的位置を問題にしていると考えられる。

また、[9][10]の対象には、人工的な操作を加えない限り、場所や位置の変化が生じない性質が見られる。つまり、地面と固定的な関係を持っていると言えよう。空を飛ぶ飛行機に対して“飞机高 (飛行機が高い)”と言わないのは、飛行機は動きをもつ対象で、地面と固定的な関係を持たないと認識されることが考えられる。“云 (雲)”や“波 (波)”のような対象は、一見動きや形の変化を持っているため、例外のように見えるが、それらの持つ動きや変化は恒常性を持つという意識が働くため、“高”と認識される。

[9][10]の対象と違い、[11]の対象は、方向や位置の変化が自由な性質を持っている。しかし、なぜ同じ位置変化の自由な対象であっても、机の上に立っている鉛筆を“*很高的 (鉛筆が高い)”と言わず、高いところにおいてある財布を“*很高的 (高い財布)”と言わないのだろうか。それは、ここで言う延長は、“铅笔 (鉛筆)”や“钱包 (財布)”の機能を果たすための意味を持っていないことが考えられる。したがって、[11]の“高”では、機能を果たすための空間的に固有のあり方における下から上までの延長が、問題にされていることが分かる。つまり、[11]の“高”は〈機能を果たすための意味ある延長を

c. $AB \rightarrow A$ 里 AB (的) “糊里糊涂 (的) (おろかである)”

d. $A \rightarrow ABB$, $A \rightarrow A$ 里 BC など “热乎乎 (ほかほかした)”

前提とした) 下から上までの線的距離が大きい) という意味特徴を持っている。ここの〈下から上までの線的距離が大きい〉という意味特徴は、[9][10]に見られる意味特徴と類似性を持つ。

[12]の“个子高(背が高い)”は、人が直立している場合も、横になる場合も、体の丈が標準より長いという意味を表す。したがって、[12]の認識において、地面との方向性や位置を問題にするのではなく、かかとから頭上までの延長を問題にすることが分かる。したがって、[12]では〈かかとから頭上までの線的距離が大きい〉という意味特徴が見られるが、これは[9]の対象に見られる意味特徴と類似している。

[13]の“鼻子(鼻)、颧骨(頬骨)”のような部分は、顔の表面から外へ突き出ているため、顔の表面が基準となり、外へ突き出ている線的量が対象として認識され、〈身体表面か垂直距離が大きい〉という意味を表す。しかし、中国語では、身体表面から突き出ている身体関連部位に対して、全部“高”と表現されるわけではない。例えば、“胸(胸)”, “臀(尻)”のような身体部位に対しては、直接“高”を使って“胸很高”, “臀很高”と表現することはあまりない。一般的に“胸”の突き出ているさまを“挺(突き出す)”という単語で表現し、“胸很挺”という形で、「胸が高い」という意味を表す。“臀(尻)”は、“翘(高く上げる)”という単語で“臀很翘”と表現し、「お尻が高い」という意味を表現する。他にもっとも多く使われている表現には、“大”が挙げられる。このように、中国語の身体部位関連の表現には、いくつかのバリエーションが見られる。

3) 複数の意味の関係とネットワークモデル

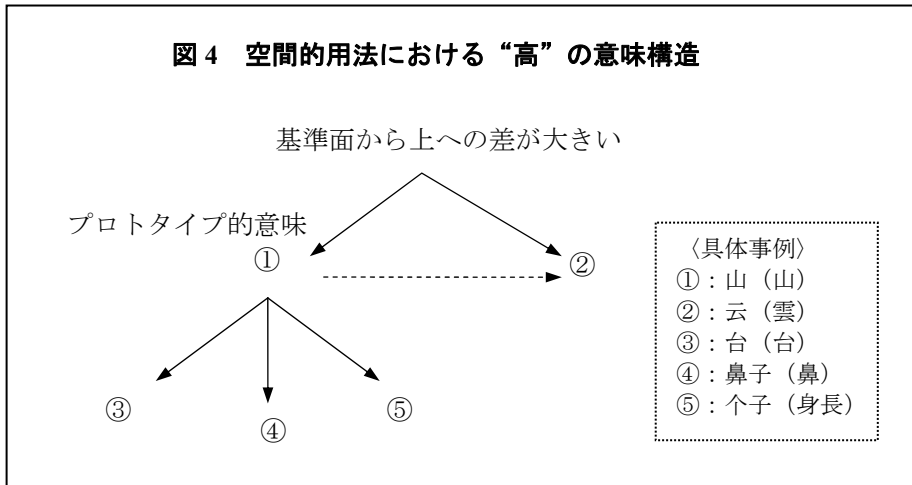
上で見られた「高い」の空間的用法の複数の意味をまとめてみると、次のようになる。

- ① 〈地面を基準面とする〉, 〈地面と垂直上方向への線的距離が大きい〉, 〈地面と固定的な関係を持つ〉。([9])
- ② 〈地面を基準面とする〉, 〈地面と垂直上方向への線的距離が大きい位置にある〉, 〈地面と固定的な関係を持つ〉。([10])
- ③ 〈(ものの機能を果たすための意味ある延長の) 下から上への垂直距離が大きい〉, 〈地面と固定的な関係を持たない〉。([11])
- ④ 〈身体表面を基準面とする〉, 〈身体表面から垂直上方向への線的距離が大きい〉, 〈地面と固定的な関係を持たない〉。([12])
- ⑤ 〈かかとを基準面とする〉, 〈かかとから頭までの線的距離が大きい〉, 〈地面と固定的な関係を持たない〉。([13])

上の複数の意味は、〈基準面から上方向への線的距離が大きい〉という特徴で共通していることが分かる。各意味によって基準の変化が見られるが、その中で地面が一番典型的な基準面となっていることが分かる。したがって、複数の意味の中で、①をプロトタイプの意味と認定し、[1]をその具体事例として認定することができる。そして、②は線的距離を還元し、空間的位置を焦点化しているため、プロトタイプの意味との類似性による拡張だと考えられる。③④⑤は、プロトタイプの意味の〈基準面から上方向への線的距離が大きい〉とい

うスキーマによって、拡張された意味だと考えられる。更に、①と②の具体事例から、〈基準面から上への差が大きい〉という意味をスキーマとして抽出することができる。

このような意味関係をネットワークモデルにしてみると、図4のようなになる。(点線の矢印は拡張関係を表し、実践の矢印はスキーマ関係を表す。)



3.2 中国語の“高”の非空間的用法

中国語の“高”の非空間的用法には、次の4つの用法が見られる。

1) 金額や量が普通より多い

[14] “价格高 (値段が高い), 工资高 (給料が高い), 血压高 (血压が高い), 温度高 (温度が高い), 死亡率高 (死亡率が高い), 人口密度高 (人口密度が高い), 频率高 (頻度が高い)”

[14]の対象は、その状態を数値で表すことができる。“价格 (値段), 死亡率 (死亡率)”のような対象は、金額やパーセンテージで表すことができ、“血压 (血压), 温度 (温度)”のような対象は、体温計などの計器で測ることができる。しかし、計器で数値が測れる対象であっても、全部“高”と認識されるわけではなく、[14]の対象のように、線的尺度上で上へ上るイメージを持たなければならない。例えば、お酒の種類を“*种类很高 (種類が高い)”と言わないし、多い日数を“*天数很高 (日数が高い)”と言えないのは、そのような特徴が見られないことが考えられる。したがって、[14]の“高”は、〈線的尺度上で上へ伸びるイメージを持つ抽象物の量が大きい〉という意味を表す。これは、山や木のような空間的に上へ延びるという特徴が、イメージスキーマとして、抽象的な数字領域へ拡張された用法だと考えられる。

2) 質・価値・程度が普通より上にある

[15] “质量高 (質が高い), 性能高 (性能が高い), 地位高 (地位が高い), 技术高 (技術が高い), 水准高 (水準が高い), 素质高 (素質が高い),

志向高（志が高い）、品位高（品格が高い）、危険程度高（危険度が高い）”

[15]の“高”は、質や価値、程度が普通より優越で、優れている意味を表す。“質量（質）”や“地位（地位）”のような対象は、その状態を数値で測ることができないが、序列尺度上で上に位置するものは、“高”と認識される。ここでは、空間的に上に位置するものは顕著さを持つため、他より優越だという意識が働く。したがって、[15]はプロトタイプの意味に見られる〈空間的に上に位置する〉という意味特徴が、イメージスキーマとして拡張された用法とだと考えられる。

3) 他人や他人のものに敬意を表す

“高”の非空間的用法には、対象の前に付けて、他人や他人のものに敬意を表す用法が見られる。

[16] “高見（ご高見）、高就（お仕事）、高論（ご高論）、高徒（御弟子）、高邻（お隣様）、高作（ご作品）、高海（お教え）、高寿（お年）”

[16]の“高”は、他人（他人のもの）を自分より上にし、自分を下に通して、相手への尊敬の意味を表す。空間的に上に位置するものは優れていて、優越さを持つというイメージが働くため、“高”と認識されると考えられる。この用法は、空間的に上に存在するというプロトタイプの意味との類似性による拡張用法だと考えられる。

4) 現実離れの意味

“高”の非空間的用法には、マイナスの意味に使用される用法も見られる。

[17] “高言（漠然とした実質的な意味のない話）、高谈阔论（大いに弁舌を振舞う）、好高骛远（高望みをする）”

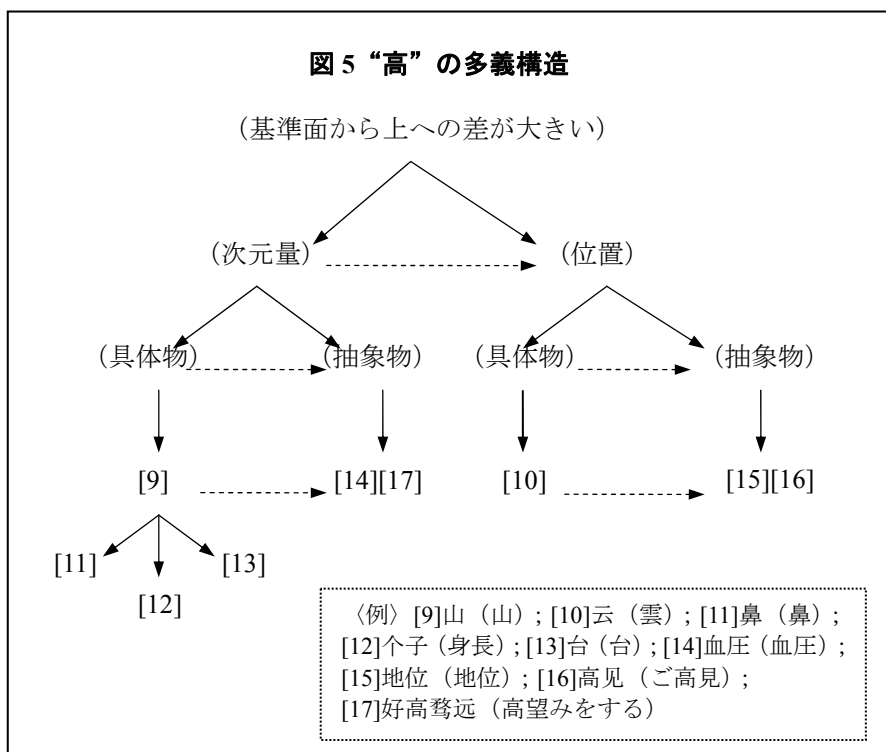
[17]の“高谈阔论（大いに弁舌を振舞う）、好高骛远（高望みをする）”は四字熟語で、“高谈阔论（大いに弁舌を振舞う）”は現実離れの話をするを意味し、“好高骛远（高望みをする）”は現実離れした高遠な目標を追求することを意味する。いずれも、現実とあまりにも離れていて、実現できない無意味なことを意味する。〈現実と距離が大きい〉という意味は、空間的用法に見られる〈基準面と線の距離が大きい〉という意味特徴と類似性が見られる。したがって、[17]の用法は、プロトタイプの意味に基づく拡張用法だと考えられる。

中国語の“高”の非空間的用法に見られる意味特徴を、次のようにまとめることができる。①線の尺度上で上へ上るイメージを持つ抽象物の量が多い。②質・価値・程度が普通より上にある。③他人や他人のものに敬意を表す。④現実と遥かに離れている。

このように“高”の意味拡張においても、知覚、イメージ形成、具体事例からのスキーマ化の能力、スキーマの拡張による新しい事例の予測能力などのような認知能力が、深くかかわっていることが分かる。このような点は、言語的な知識の記述と分析を中心にされている先行研究で、あまり言及されていない。

3.3 中国語の“高”の意味体系

上で見てきた“高”の空間的用法と非空間的用法に見られた複数の意味の関係を、図式してみると、上の図5のようなになる。(点線の矢印は拡張関係を表し、実践の矢印はスキーマ関係を表す。)



4 日本語の「高い」と中国語の“高”の意味体系の対照

4.1 意味拡張に見られる認知プロセス

日本語の「高い」と中国語の“高”はプロトタイプの意味が類似しているだけでなく、意味拡張に見られる認知プロセスも大きく類似している。

1) 空間的用法の意味拡張に見られる認知プロセス

i) スキーマに基づく事例化

「高い」と“高”のプロトタイプの意味の事例(「山」, “山 (山)”)と拡張事例(「雲」, “云 (雲)”)は、〈基準面から上への差が大きい〉というスキーマに基づく事例化として考えられる。

ii) プロトタイプの意味に基づく拡張

「高い」と“高”には、プロトタイプの意味との類似性に基づく拡張が見られる。例えば、「高い雲, 高い日」, “天很高 (空が高い), 太阳高高的 (太陽が

高い”は、地面から大きく離れている位置に存在するという意味を表すが、〈地面からの線的距離が大きい〉という点で、プロトタイプの意味と類似しているため、この類の拡張として考えられる。

iii) 具体事例に基づくスキーマ化

プロトタイプの意味の事例（「山」，“山（山）”）と拡張事例（「雲」，云（雲））の類似性，共通性に基づいてスキーマ（〈基準面から上への差が大きい〉）を抽出する点で共通している。

2) 非空間的用法の意味拡張に見られる認知プロセス

「高い」と“高”の非空間的用法の意味拡張に見られる認知プロセスは、表1のようにまとめることができる。（○は拡張事例が見られることを表し、×は拡張事例が見られないことを表す。）

表1 非空間的用法に見られる認知プロセス

	イメージスキーマによる拡張	類似性による拡張
「高い」	○	×
“高”	○	○

“高”の非空間的用法においては、プロトタイプの意味との類似性による拡張（例，[16]“高見（ご高見）”；[17]“好高騖遠（高望みをする）”）とイメージスキーマによる拡張（例，[14]“血压（血压）”；[15]“地位（地位）”）関係が見られるが、「高い」の非空間的用法においては、プロトタイプの意味からイメージスキーマによる拡張用法（例，「血压，地位」）しか見られなかった。

4.2 五感にかかわる意味拡張

「高い」と“高”の空間認知において、五感にかかわる経験がわれわれが次元性を把握する経験的基盤となる。「高い」と“高”の五感にかかわる拡張をまとめると、表2のようになる。

表2 五感にかかわる意味拡張

	視覚	聴覚	嗅覚	味覚	触覚
「高い」	○	○	○	×	×
“高”	○	○	×	×	×

「高い」と“高”は、五感のうち、視覚と聴覚へ拡張される点で共通しているが、嗅覚経験による対象の捉え方に違いが見られる。「高い」の嗅覚経験による表現には、「香りが高い」という表現が見られるが，“高”には嗅覚への拡張は見られない。それは、中国語の“香味（香り）”“味儿（匂い）”は、上へ広まるイメージがなく、幅広く遠くまで広がって、人の鼻を刺激するというイメージを持っていることが考えられる。香りや匂いの動きに対して、“漂（漂う）”という動詞が使用されることが多い。例えば，“香漂万里（香りが万里まで漂う）”“香漂四海（香りが全国各地，世界各地へ広がる）”のような表現があるが、周囲へ幅広く影響するという意味を表す。

4.3 意味体系における空間的用法と非空間的用法の役割

「高い」と“高”の意味拡張の背後には、空間と非空間の本質的な違いから、把握しにくい対象を、空間という把握しやすい対象を通して理解するという認知プロセスが潜んでいる。つまり、空間的な対象から把握されたイメージを非空間的な対象へ投影させると解釈できる。したがって、「高い」と“高”の意味体系において、空間的用法は起点領域、非空間的用法はイメージが写像される目標領域の役割を果たしていると考えられる。

5 おわりに

「高い」と“高”の意味体系の対照を通して、「高い」と“高”は、嗅覚経験を介する対象の捉え方に違いが見られるが、プロトタイプの意味、意味拡張に見られる認知プロセス、意味拡張の仕方が大きく類似しているという結論が得られた。つまり、「高い」と“高”の非空間的用法には違いが見られたが、根本的な意味の捉え方には違いが存在しないと考えられる。

今回の日中対照研究では、大きな相違が見られなかったが、このような分析が、他の次元形容詞の意味と意味体系の実態を考える際、一つの手掛かりになればと思う。また、今回は個々の意味と複数の意味の関係に関する記述が多くなり、空間的用法から非空間的用法へ拡張する動機付けに関して深く触れることができなかったが、今後の課題にしたいと思う。

【文献】

- 久島茂（2001）『《物》と《場所》の対立——知覚語彙の意味体系』くろしお出版
- 國廣哲彌（1971）「日本語次元形容詞の体系」『言語の科学』2号
- 小出慶一（2000）「次元形容詞の空間的用法と非空間的用法」『群馬県立女子大学紀要』第21号
- 西尾寅弥（1972）『形容詞の意味・用法の記述的研究』国立国語研究所／秀英出版
- 松本曜編（2003）『認知意味論』大修館書店
- 舩山洋介（2001）「多義語の複数の意味を統括するモデルと比喻」『認知言語学論考』No.1, ひつじ書房
- （2010）『認知言語学入門』研究社
- 山梨正明（2000）『認知言語学原理』くろしお出版
- （2004）『ことばの認知空間』開拓社
- 朱德熙（1956）《现代汉语形容词研究》《语言研究》第1期
- 陆俭明（1989）《说量度形容词》《语言教学与研究》第3期

A Contrastive Study of Japanese and Chinese Dimensional Adjectives of Height in Their Semantic Systems

JIN Shanhua

Dimensional adjectives of height, “takai” in Japanese and “gāo” in Chinese, have spatial and non-spatial uses. It is noteworthy that their non-spatial uses are slightly different from each other. This seems to be due to the fact that the cognitive modes how their meanings are cognized are different. The semantic studies on these words hitherto made mainly center around the description and analysis of their linguistic meanings. There are not so many works, on the cognitive and performance ability of their user that elucidated the cognitive system for their semantics. Based on the works by Kunihiro (1971), Nishio (1972) and Momiyama (2001), I reconsidered the multiple meanings of “takai” and “gāo”, describing the relations among them in terms of a semantic network. I explored the cognitive processes in which the meanings of both words are extended and their whole semantic systems in which they develop, and identified some difference between them. Comparing these two words, we have concluded the following three points.

- (1) Their prototypical meanings and their cognitive processes for meaning extension as well are highly similar.
- (2) The modes in which their users cognize space are similar to each other in how the objects evaluated by them are experienced in terms of all the five senses but the sense of smell.
- (3) Their spatial uses both belong to the region from which their users view the relevant object, and their non-spatial uses both belong to the region on which the image of the cognized object is projected. Thus, both words are supposed to be similar in extension and cognition of their meanings.

Key words: prototype, schema, meaning extension